

ある物をつらけ付て目計りをあまそくたを引もあり亦世にの
 男の小社の事を知らず一感の肌衣を神に奉りて統をまゝに
 計りしむひらぬひらぬのぬく見も如くして標の裏を
 あくをさるあり 下 畧足八實氷の以て元福の以て風の風俗を云
 き一なり その以婦女の塗を小社の燈箱に六八社まゝに中家草の
 足袋まのの山東の骨草まま寺に添考すつまひら

○八水随孝子世々素樸の社を切て下へ下へ一へ松永
 正始するといふ事よく人の知る事あり麻上への紙を切一ゆも遠
 うぬ事あり裏付上下へ小坂遠の葉の給はらる小坂小始て
 せしき一なり弘まりて今常徳とままり夏の肩衣小啓物を用
 る事松平直州侯より始る海子肩衣小啓物を用ひ一ゆ小坂
 遠及後二男政平よりまるといひ又老人雜活小見入なり

せんたま この名をうせんこう
 半袴の迦迦流心いふ始まるとあり

○木綿は伊賀今の製法のももあり なうせうせん 赤の母始て製葉の
 子ありし時をせしれ 中老人雜活小見入なり

○谷原の瀬川五郎家忠實永中大村長兵衛澤南を連て
 江戸へ下向け 後系小坂 大なる所方馬の澤清も好時江戸より此處に
 年は金部より後系小坂より孫代に江戸小坂ま

○實氷の頂大伴の町の裏家佐久ら某家の婢女をけり入の
 に意の志事 朝夕の飯菜菜蔬を食ふつた物をと馬人小絶
 一はあいらるもの残もいへ流の陽上烟を釣てたまり 物を
 食ふ 常小松を食ふのもも 志事 小食比企小坂より行が
 比老湯船山へ系流 一日身の大日如葉をねせんのを取ひ一ふ

○十月十八日吉原宗基入江目甚苦死六十死九今も深川宗基院
 并幕あり○十二月廿六日明人吳宗親率二本校上行す小幕あり
 明彰の乱を避く事あり一人あり○二十三日宗親一人ら昨後後より
 櫻井久吉(交代) 久吉は寛初中を建てるものなり
 無極久吉と号し今も未續せり

正保二年乙酉 五月間

二月十五日丹布くく丹の如く○二月廿二日田舎坊を府國宗道
 世しく空仁と号しけり廿一才ふと率 後世の世の初めと幕あり
 本家の山中親隆(あまの)
 ○多氣親田明非淡菊より山登(梅) げりあり一多氣山
 深川院にひの時宗親後
 ○江戸より梅を焼く 多氣山(梅)の元祖と云ふ
 ○十二月二日長島之森
 率八十三才 ○十二月十一日東海と澤宮和尙寂 世宗(長島)之元祖と云ふ
 師弟をたてて其の宗を承けて候す

同二年丙戌

十月漢去兵乱未止明の解款平戸二官 鄭世(鄭)と云 平部(後)をた

○冬并込派松と宗刺 屏山(正)修福所 屏基(宗)公(元)なり

○金工平田氏祖道仁率宗長中朝鮮人より七宝流一の法を傳へ人

○大島居氏(佐)祐と率府非康小友中終句を傳へ事あり村

并宮居再真次

同二年丁亥

二月六日小塔遠(後)率 友東政一(親)の号は南今年六十才之繁(親)山(家)庵小

五門人之(斎)あり ○二月十五日夜月の暈に方月影の如く曉の月には現る

○二月廿日官医管迎院園奉去法(平)率 度庵(祥)雲と云 并(若)井(氏)

○五月十三日江戸大地表上時大佛の像(障)版(紙) ○七月廿二日水(障)障

○九月十五日刀劍(目)利(本)庵(在)方(庵)終 織田(家)不(仕)一人あり

○十二月十二日 台命ふより王子村小治て松平藩力以て大進封
具行あり も物とあるは十三日由山に十日平坂原の辺あり

○十一月箕輪某もつ後向必地流るる邊 に世春海法下造とあり首領は
湯乃小て乃湯小某一とありと云

世年間記事

正保中日向坐寄海山の瀬河を渡りて大坂へ登せ大坂より京
下へ先は舟屋富士山麓角と名付一りの大内小止あり面内無
三唐松の三種の御唐二年の次武江下をまより橋よりて出
立ふかたり ○大橋を常盤橋と改めしれは正保の始ありとある
○十河ひさひとて歌をぬく事とある十河辰とて小武家の人乃以
はききりひひかふる事とある又此時代迄は意氣熱を好む事流る
る形記ふりの祭を世世の声小橋りよと云ことりひの松虫の声

と云ふこととあるを以て詞ありと云

○世事終ふまは時代京室町祭のり吉徳の御を賣始むと後

二條市川字を賣るの事いづれ嵐是を創製せしやふと云の大好菴

發見者志あると始と云 東尾高ののちある寛文中京室町まで因一若虎
中村のまゆ御世世をわたりとありつりまの未詳

○寛文正保の以長崎より唐舟の高人利宗永本と云と云の
記すもありの沈の坊小治一始て古書籍の賣買をせり後大書肆

也と云ふは是十三年賣買のようもいと云
○或は家の高橋小正保年中は國の官事あり方城を唐一由川

浪高前若指本親目益為込ふりりある大川を流りて京市津の邊

寛永の國小治り一國中蔵ありて後角宮殿後山鷹の隠れ下赤
が居あり日本橋の角よりうらん坂ありあり中二浦坂の辺二浦
と飛越後山鷹ありと東向山門あり門の東より後山鷹
町ありありあり

慶安元年戊子 正月朔 二月十五日改元

慶安元年改元ありしを

改元の法慶安徳の天下也 平井卜養

○春荒蒲山小亮朝院七面堂慶安十一年今の如く
言申うりしなり

○谷中史命院七面堂長山月朔上人三匹の局より七面堂あり日の方
系院一後中小籠一板を蔵に蔵を割と云

○四月十一日天海僧也慈眼大師と号すをのみ

○日光山二十二日回清忘淨法念法華八卷あり本末の系編法苑珠林の記
あり

○五月男名をむらひ申掛荒ねむり事を林せむる林時行某
麻糸とりて英お年の事小付落動ふ及ひり昔く相済ふ
りり男色の事此もとり止寛文の頃より又行きりりあり
ありて止りりり同書よりり 昔の方云ふ小男名をむらひ荒ねむり道と云ふは
前代と云荒ねのたれ及ふ取席のたれと云編後
ゆてを
信云あり

○九月十日因形稻荷社建立若林兼光と
云人界附に

○江戸中風呂屋の遊女法割林あり

同二年 己せ

日暮里諏訪明神社造営 是と云六條の若
相ありしと云 ○大塚善門山大慈寺造営

○二月十日持世平小の
氏十七年一本
三年四月七日云 麻疹流行也

○六月廿日武蔵大北原江戸中武蔵町倉澤と死人怪人等 上野
大仏

○五月十三日河越大敷陵 重廿二斤小八
平ぬ人ら墓見

○八月廿日江戸大地震 ○九月琉球人系碇 （正徳興志） 日光山へ参詣 （川王）

安二 庚寅 十月国

二月山王権現社 津城内より院町へ移る （一院より寛永七年より移りしもの後万治二年今の如く移りしものあり）

○男女修験宗廟へ系詣より事行る （今云ふは）

○二月廿二日夜江戸大地震あり ○三月十二日狭容幡隨院長を掃

死 （寺僧人にも給災はといへども終くともて安んずるは横墓へ今も浅草深空寺あり） 昇拜岐の年回を吊り ○五月國へ渡る

○六月二日法國毛氈 （長） ○六月二日より浅草寺を觀る （是は普濟院）

○琉球人系碇 ○仲井絨起 ○八月七日後父那き大風雨氷降 （本）

（女より） 十女位

同日 辛卯

東叡山 津宮津造堂 （正月法被屋を修めおと不造りしを津再建あり）

○二月十二日狩野山雪率 （六十三） ○秋深川八幡宮を遊ぶ （是の法）

或きうりし流編り真行始ふ ○中村幼之丞を所稱直町へ根町

うりる ○十一月廿九日仲井の堂敷修成せしむ

○十二月廿七日菅中藏意より長上人寂

此年間記事

酒殿といふ事行る慶安のより大塚の地蔵坊持次池上の大徳丸

慶源をいふ名せし大酒の業を結ひて酒を賣り事あり

とて類案を記しし水産記といふ冊あり （は寛文二年小下りせり）

（寛文元年より又川崎稲荷の田舎屋より孫る後孫より承る七合入のさまり中）

○寛永永日米兼意の以て合根と名せり （是は河町支留町乃）

今年玉川の上水京都下通して元禄の用も元々あり

○玉川上水の事一海の石甲及丹波山の嶽谷を越して同山丹波村を

とて武蔵の慶長郡より甲斐一の嶽より多津浦村と七里餘まで

羽村まで十二里までなりと云ふ計りて羽田浦より海へ合は

九年 兼寛元年の春玉川を築き兼清を築つてこの水より羽村

より江戸までの水道を考へ同十月上水と皆別の後を命せしむ

おれの翌年己未初夏より仲冬より羽村より江戸へ本末並進後一

虎直門まで玉川の水を掘りてとて以後徳方武蔵の方市中

小分水にて日用と云ふ本板直門外玉川管轄の社の玉川

○神田上水を園き一車の水を流せりて武徳編年集流ふた之條

某天に申ふ 今命をたてて水道を考へてより多摩川の流を

小石川より引りてとて一河を七所ともあり

小石川を引りてとて一河を七所ともあり

小石川を引りてとて一河を七所ともあり

小石川を引りてとて一河を七所ともあり

小石川を引りてとて一河を七所ともあり

小石川を引りてとて一河を七所ともあり

小石川を引りてとて一河を七所ともあり

小石川を引りてとて一河を七所ともあり

小石川を引りてとて一河を七所ともあり

小石川を引りてとて一河を七所ともあり

小石川を引りてとて一河を七所ともあり

助ありとある今より此を藤倉村とす（此流藤倉村むれ） 年終村より藤倉と
 十二村を経るもさ田村より月日香の中より二つふるも一流の流
 ありて大洗堰より江戸川より藤倉一流ありて小日向より
 あり藤倉津波の中より流とすして年終村より藤倉あり
 植ありて流るをもさ堰より流るも流津波の堰梅を流ひ
 小川町を流るも津田よりあり津田よりありのありて又二筋の津田橋
 よりも滝窪橋より年終町年終町辺より藤倉よりあり本村本町を
 支國の辺渡町等よりあり町数九二百七十丁程あり
 支上より海せざるありと本波溜池のありて引を解新くの水溜は
 池のありてこより引て用ありて一より一より強き水溜ありて
 池よりありて分民過り流りて快樂の思ひをたのむ事後より

津懸澤作きては花ありありとありとありとあり

○正月二日舟込津門の月青山某の婢女菊とありありのまがねを秘蔵
 の思を破りて書せりてまがねを靈籠出ありをまがね事人より秘蔵
 まがねもまがねを破りてありてありてありてありてありてありてあり

○九月琉球人來聘 （正徳） ○金剛寺台忌氏祖室改葬 （八十二）

○秋名城易行院小使客助ありとありとありとありとありとありとありとあり

○義徳二年己二月十一日鶴一側女のはなあり （を以てまがねの化中鳥とあり）

○舟懸枝を指しあり
 一の香を掘く

義徳二年 甲午

源家と親世吉田娘 （は所費積を合三百あり入れの藤一善後）

○今年町奴津穿針數あり （まの市にまがね藤倉大橋を築ありてありてありてありてありてありてあり）

